論文

陸游の梅花絶句について

三野豊浩

〔要旨〕

宋代の詩人たちにとって、梅花は特別な愛着の対象であった。このことは、内面性を重んじる彼らの美意識が、まだ寒いうちに咲く梅花に孤高の美を見出したことによると考えられる。宋代には詠梅詩が詩人たちの一大公案となり、梅の詩を多数手がける詩人も出現した。南宋を代表する大詩人陸游もその一人であり、その『剣南詩稿』には、詩題に明記するだけでも百五十首を越える詠梅詩が収録されている。この論文では、まず最初に陸游の生涯にわたる梅花詩の創作状況を一覧表にして概観し、それから『剣南詩稿』巻五十に収録されている「梅花絶句」六首のすべてを紹介し、詳しく解説する。これらの作品は『宋詩鈔』にまとめて収録されており、特に其三は陸游の詠梅詩の中で最も有名な作品と言っても過言ではない。

〔キーワード〕宋代、南宋、陸游、『剣南詩稿』、『宋詩鈔』、『宋詩精華録』、七言絶句、梅花、詠梅詩、連作

宋代の詩人たちにとって、梅花は特別な愛着の対象であった。梅は古く『詩経』召南の「摽有梅」にもうたわれているが、これは梅の実を思いを寄せる相手に投げつける習俗をうたう詩であり、花には触れられていない。古代において梅はむしろ実の方が重んぜられ、花の方は必ずしも尊重されなかった。梅花が詩にうたわれるようになったのは六朝時代になってからであり、南朝宋・鮑照の「梅花落」は、その早い例の一つである。唐代には一般に梅花がうたわれることが稀であるが、これは、北方の長安一帯の気候風土が梅の生育に適さなかったことが主因であると思われる。梅花が特別な花として尊重されるようになるのは宋代になってからであり、このことは『瀛奎律髄』が

特に「梅花類」一巻を設けていることに端的に表れている。宋代以後、梅花にはまだ春の訪れない寒いうちに花を咲かせる性質から「孤高」「清楚」「貞潔」「忍耐」「節操」などのイメージが付与されたのみならず、逆境に耐えての政治的抵抗を象徴する花ともなった。また、宋代には梅花に対する熱烈な崇拝者も現れ、詠梅詩が詩家の一大公案と呼ばれるようになり、詠梅詩を数十首、数百首作る者もあらわれた。こうした傾向は、文化芸術全般において外面的なものよりも内面精神を重んじる宋人の美意識と無関係ではなく、彼らが花の観賞においても哲学的、倫理的であることを尊んだことによると考えられる。[1]

南宋を代表する大詩人として知られる陸游（放翁　一一二五～一二一〇）は、こうした宋人の代表格であり、その長い不遇の生涯において、折に触れては梅花をうたっている。[2] 栄斌氏の『中国詠梅詩詞集萃』（二〇〇一年二月、中華書局）は、陸游の詠梅詩を二十三首、詠梅詞を二首収録し、「古今の一流の詩人の中で、梅をうたう詩詞を最も多く作ったのは、陸游である。古今のあらゆる詩人の中で、梅をうたった詩詞に最も佳作が多いのも、やはり陸游である」と高く評価している。同書によれば、陸游の梅花詩は全部で百五十余首存在するという。[3] そこで銭仲聯氏の『剣南詩稿校注』（一九八五年九月、上海古籍出版社）にもとづいて調べてみたところ、詩題に「梅」もしくは「梅花」と明記するものは、逸稿所収の一首も含め、合計百五十七首であった。[4] これらをすべて整理したのが、次の一覧表である。詩の制作年及び制作地は、『剣南詩稿校注』の題解に従った。[5]「巻数」とあるのは、『剣南詩稿』における巻数のことである。形式の「七」は七言、「五」は五言、「雑」は雑言、「古」は古詩、「律」は律詩、「絶」は絶句を、それぞれ表す。また『律髄』とあるのは『瀛奎律髄』のことである。紙幅の都合で、詩題の訓読は省略した。

制作年（西暦）	詩題	形式	巻数	制作地	備考
紹興二十四年（一一五四）	看梅絶句	七絶	一	山陰	五首連作
紹興二十八年（一一五八）	客舎対梅	七律	逸稿	上虞	
	平陽駅舎梅花	七絶	一	平陽	
乾道八年（一一七二）	梅花	七律	三	成都へ赴任の途中	『律髄』所収
	再賦梅花	七律	三	同右	
乾道九年（一一七三）	西郊尋梅	七古	三	成都	
	分韻作梅花詩得東字	七律	三	成都	
	梅花	七律	四	嘉州	四首連作『律髄』所収
	十一月八日夜灯下対梅花独酌累日労甚自慰也	七律	四	嘉州	『律髄』所収
	十二月初一日得梅一枝絶奇戯作長句今年於是四賦此花矣	七律	四	嘉州	『律髄』所収
淳熙元年（一一七四）	荀秀才送蝋梅十枝奇甚為賦此詩	七律	四	嘉州	『律髄』所収

淳熙三年（一一七六）	梅花	七古	八	成都	
淳熙四年（一一七七）	平明出小東門観梅	雑古	八	成都	
	故蜀別苑在成都西南十五六里梅至多有両大樹夭矯若龍相伝謂之梅龍予初至蜀嘗為作詩自此歳常訪之今復賦一首丁酉十一月也	七古	九	成都	
	城南尋梅得絶句四首	七絶	九	成都	四首連作
	江上散歩尋梅偶得三絶句	七絶	九	成都	三首連作
	漣漪亭賞梅	七律	九	成都	『律髄』所収
	芳華楼賞梅	七古	九	成都	
	浣花賞梅	七律	九	成都	
	蜀苑賞梅	七律	九	成都	
	大醉梅花下走筆賦此	五古	九	成都	
	宿龍華山中寂然無一人方丈前梅花盛開月下独観至中夜	五古	九	成都	
	次韻張季長正字梅花	七律	九	成都	
	看梅帰馬上戯作	七絶	九	成都	五首連作
	城南王氏荘尋梅	五古	九	成都	
	道上見梅花	七絶	九	成都	
淳熙五年（一一七八）	小飲落梅下戯作送梅一首	七律	九	成都	
	梅花絶句	七絶	十	建安	十首連作
淳熙六年（一一七九）	梅花	七律	十一	撫州	
	雪中尋梅	七絶	十一	撫州	二首連作
	江上梅花	七律	十一	撫州	
	園中賞梅	七律	十二	撫州	二首連作『律髄』所収

淳熙七年（一一八〇）	六日小飲園中光景暄妍紅梅已拆恍記在果州時偶得絶句	七絶	十二	撫州	
	庚子正月十八日送梅	七古	十二	撫州	
淳熙八年（一一八一）	雪後尋梅偶得絶句十首	七絶	十四	山陰	十首連作
	携瘻尊醉梅花下	七古	十四	山陰	
淳熙十年（一一八三）	探梅	七絶	十五	山陰	二首連作
淳熙十一年（一一八四）	樊江観梅	七律	十七	山陰	『律髄』所収
	山亭観梅	七律	十七	山陰	
	射的山観梅	七律	十七	山陰	二首連作『律髄』所収
	別梅	七律	十七	山陰	
	憶梅	七律	十七	山陰	
淳熙十三年（一一八六）	置酒梅花下作短歌	五古	十七	山陰	
	梅花已過聞東村一樹盛開特往尋之慨然有感	七律	十七	山陰	
紹熙元年（一一九〇）	村居日飲酒対梅花醉則擁紙衾熟睡甚自適也	七律	二十一	山陰	
紹熙二年（一一九一）	梅花絶句	五絶	二十四	山陰	十首連作
	小園竹間得梅一枝	七古	二十四	山陰	
	梅花絶句	七絶	二十四	山陰	二首連作
紹熙三年（一一九二）	観梅至花涇高端叔解元見尋	七絶	二十四	山陰	二首連作
	探梅	七古	二十六	山陰	
	落梅	七絶	二十六	山陰	二首連作
紹熙四年（一一九三）	紅梅	七絶	二十六	山陰	二首連作
	紺梅	七絶	二十六	山陰	三首連作

紹熙五年（一一九四）	北坡梅開已久一株独不著花立春日忽放一枝戯作	七絶	二十九	山陰	
慶元元年（一一九五）	灯下看梅	七律	三十三	山陰	
慶元二年（一一九六）	春初驟暄一夕梅尽開明日大風花落成積戯作	七絶	三十四	山陰	三首連作
慶元四年（一一九八）	古梅	五古	三十六	山陰	
	梅花	七絶	三十八	山陰	六首連作
	南園観梅	七律	三十八	山陰	
慶元六年（一二〇〇）	開歳半月湖村梅開無余偶得五詩	五古	四十二	山陰	五首連作
	以煙湿落梅村為韻				
	梅花	五絶	四十四	山陰	五首連作
	南園観梅	七律	四十五	山陰	
嘉泰元年（二〇一）	東園観梅	七律	四十五	山陰	
	題施武子所蔵楊補之梅(6)	五絶	四十五	山陰	題画詩
	探梅至東村	七律	四十八	山陰	
	嘲梅未開	五絶	四十八	山陰	
	早梅	五絶	四十九	山陰	
	梅花絶句	七絶	四十九	山陰	四首連作
	小飲梅花下作	七律	四十九	山陰	
嘉泰二年（二〇二）	**梅花絶句**	七絶	五十	山陰	六首連作
嘉泰三年（二〇三）	与子坦子聿元敏犯寒至東園尋梅	七古	五十五	山陰	
	梅	七律	五十六	山陰	『律髄』所収
嘉泰四年（二〇四）	梅花過後遊西山諸庵(7)	七律	五十六	山陰	
	探梅	七律	六十	山陰	

開禧三年（二〇七）	暁起折梅	七絶	七十四	山陰	
嘉定元年（二〇八）	梅開絶晩有感	七絶	七十五	山陰	二首連作
	湖山尋梅	七古	八十	山陰	二首連作
	梅	七絶	八十	山陰	二首連作

まず最初に、この一覧表をもとに陸游の詠梅詩を概観しておこう。陸游の詠梅詩のうち最も早いものは、高宗の紹興二十四年に故郷の山陰（浙江省紹興）で書かれた七絶「看梅絶句」五首である。当時陸游はまだ三十歳、科挙の省試で落第した年にあたる。それから四年後の紹興二十八年、初めての出仕で福州（福建省）へ赴任した年に、七律一首と七絶一首が書かれている。現存する入蜀以前の詠梅詩は、以上七首のみである。

孝宗の乾道六年（一一七〇）、陸游は蜀の夔州（四川省奉節）へ赴任し、その後王炎に招かれて前線基地の南鄭（陝西省）へ赴任する。夔州でも南鄭でも、梅の詩は書かれていない。乾道八年年末、成都（四川省）に赴任する途中に書かれた七律「梅花」が、蜀における最初の詠梅詩である。これ以後、淳熙五年春に蜀を離れるまでの間に、合計三十六首の詠梅詩が書かれている。その大半は成都での作であり（二十七首）、次いで嘉州（四川省楽山）での作が多い（七首）。なお、乾道八年から淳熙三年までに書かれた詠梅詩はそのほとんどが七律であり、七絶は一首も存在しない。

淳熙四年は陸游の生涯を通じて最も多くの詠梅詩が書かれた年であり、その総数は二十三首に上る。それらは内容のみならず形式においても多様であり、多い順に、七絶十三首、七律四首、五古三首、七古二首、雑古一首となっている。七絶の詠梅詩は四題十三首で、順に「城南尋梅得絶句四首〔城南に梅を尋ね、絶句四首を得たり〕」四首、「江上散歩尋梅偶得三絶句〔江上を散歩し、梅を尋ねて偶たま三絶句を得たり〕」三首、「看梅帰馬上戯作〔梅を看て帰り、馬上にて戯れに作る〕」五首、「道上見梅花〔道上にて梅花を見る〕」一首である。翌淳熙五年正月に書かれた七律一首が、蜀における最後の詠梅詩となる。

淳熙五年春、陸游は蜀を離れ東に帰る。故郷に落ち着く間もなく、同年冬には南の建安（福建省建甌）に赴任。ここで、七絶「梅花絶句」十首が書かれる。これは、「梅花絶句」と題する連作としては最初にして最大規模のものである。[8] その後陸游は撫州（江西省臨川）に転任し、淳熙六年から七年にかけて同地で六題八首の詠梅詩を書いている。それらは多い順に、七律四首、七絶三首、七古一首である。

淳熙七年冬、陸游は撫州の任期が満了して帰郷、その後弾劾されて新しい任命を取り消され、以後淳熙十三年まで故郷で閑居生活を送る。これ以後没するまでの詠梅詩は、すべて故郷の山陰で書かれており、全部で九十六首に上る。七絶について見るならば、淳熙八年に「雪後尋梅偶得絶句十首〔雪の後梅を尋ね偶たま絶句十首を得たり〕」が、淳熙十年に「探梅」二首が書かれている。蜀から帰郷後、孝宗の淳熙年間に故郷で書かれた詠梅七絶はこれだけであり、淳熙十一年には七律ばかり六首が書かれている。陸游は、淳熙十三年七月から同十五年七月まで厳州（浙江省建徳）の知事として赴任し、任期満了の後、今度は臨安（浙江省杭州）の朝廷で勤務する。しかし淳熙十六年冬、またもや弾劾されて失脚し帰郷。以後没するまでの二十年間、ほとんどの時間を故郷で過ごす。厳州でも臨安でも、詠梅詩は書かれていない。

光宗の紹熙年間はわずか五年であるが、その間に二十五首の詠梅詩が書かれている。それらは多い順に、七絶十二首、五絶十首、七古二首、七律一首であり、七絶が最も多い。七絶の詠梅詩は六題十二首で、順に「梅花絶句」二首、「観梅至花涇高端叔解元見尋〔梅を観て花涇に至り、高端叔解元に尋ねらる〕」二首、「落梅」二首、「紅梅」二首、「細梅」三首及び「北坡梅開已久一株独不著花立春日忽放一枝戯作〔北坡の梅開きて已に久しきも、一株のみ独り花を著けず。立春の日に忽ち一枝を放ち、戯れに作る〕」一首である。注目すべきは、紹熙二年に五絶「梅花絶句」十首が書かれていることで、これは五絶の詠梅詩としては最初にして最大規模の連作である。[9]

寧宗の時代には、合計五十首の詠梅詩が書かれている。それらは多い順に、七絶二十四首、七律九首、五絶八首、五古六首、七古三首である。七絶は、慶元年間に「春初驟暄一夕梅尽開明日大風花落成積戯作〔春初驟かに暄かく、一夕梅尽く開くも、

明日大風あり、花落ちて積を成し、戯れに作る〕」三首及び「梅花」六首の九首。嘉泰年間に「梅花絶句」四首及び後で紹介する「梅花絶句」六首の十首。開禧年間に「暁起折梅〔暁に起きて梅を折る〕」一首。最晩年の嘉定年間に「梅開絶晩有感〔梅開くこと絶だ晩く感有り〕」二首及び「梅」二首の四首が、それぞれ書かれている。陸游は嘉泰二年六月から約一年間臨安に滞在するが、同地では梅の詩は書かれていない。総じて陸游の詠梅詩は、身辺の慌ただしい時期には書かれていないようである。梅花にいかなる心情を託するにせよ、詠梅詩は基本的に閑適の詩であり、心理的時間的に余裕のある時期、特に故郷に閑居している時期に多く書かれているのは自然なことであろう。

形式別に見るならば、最も多いのは七絶（二十四題八十首）で、全体の過半数を占める。次に多いのが七律（三十二題三十七首）で、そのうち十五首が『瀛奎律髄』に収録されている（一覧表参照）。更にその次が五絶（五題十八首）で、残りは各種の古詩である（七古十題十一首、五古六題十首、雑古一題一首）。不思議なことに、五律は一首も存在しない。七絶は全体的に連作が多く、一題で一首のものはわずかに五首である。連作の規模は、少ないもので二首、多いもので十首。二首、三首といった小規模の連作が比較的多く、十首の連作は二組のみである（五絶は一組のみ）。

これらの作品のすべてについてこの小論で詳述することは、もとより不可能である。そこでここでは、最も代表的な作品として『剣南詩稿』巻五十に収録された「梅花絶句」六首を紹介し、陸游詠梅詩の世界をかいま見ることにしたい。この連作は、嘉泰二年（一二〇二）正月、年明け間もない頃[10]に、故郷の山陰で書かれている。時に陸游七十八歳。連作の其三は陸游の詠梅詩の中で最も有名なものと言っても過言ではないが、『宋詩鈔』の『剣南詩鈔』が六首すべてを収録する以外には、連作全体を収録する選集はごく少ない[11]。しかし、連作として書かれたものは連作として鑑賞するのが本来と考えるので、ここではそのすべてを紹介し、解説することにした。作業にあたっては『剣南詩稿校注』を底本とし、『宋詩鈔』その他を参照した。ただし、表記は新字体、新仮名遣いとした。

其一

●○●●●○◎
幾年不到合江園
●●○○●●◎
説著当時已断魂
●●○○○●●
只有梅花知此恨
○○●●●○◎
相逢月底却無言

其の一

幾年か合江園に到らざらん
当時を説著せば　已に魂を断つ
只だ梅花の此の恨みを知るのみ有らんも
月の底にて相い逢えば　却って言も無し

《梅の花の絶句》その一

もう何年、合江園に行っていないことだろうか。当時のことを話そうとすると、もうそれだけで魂の断ち切れそうな思いがする。ただ梅の花だけは、この無念の思いを知っていることであろうが、月の光の下で顔を合わせれば、かえって互いに言葉もない。

連作は、成都時代の回想からはじまる。陸游が蜀に滞在したのは、乾道六年（一一七〇）冬から淳熙五年（一一七八）春までの足かけ九年である。その間任地を転々としているが、中でも成都で范成大（一一二六～一一九三）の幕府に身を寄せた時期は、陸游にとって忘れがたい日々であった。長官である范成大は陸游を文学の友人として厚遇し、身分の違いを度外視して詩文を語りあい、多くの作品を応酬した。[12] しかしそれは同時に、失地回復の理想が挫折し、南鄭の前線基地から撤退を余儀なくされた失意と無念の日々でもあった。ここで陸游は、一言では語れない複雑な思いを胸に、往時を回想しているのである。陸游が蜀を離れてから、この時点ですでに四半世紀に近い年月が経過している。

「合江園」は、成都にあった庭園の名。成都を流れる二すじの川が合流する地点にある。蜀から帰った直後に建安で書かれた「梅花絶句」（『詩稿』巻十）其五に「蜀王小苑旧池台、江北江南万樹梅〔蜀王の小苑　旧池台、江北　江南　万樹の梅〕」とあり、同詩の自注には「成都合江園、蓋故蜀別苑、梅最盛〔成都の合江園は、蓋し故蜀の別苑にして、梅最も盛んなり〕」とある。「故蜀」とは、唐が滅びた後に治乱興亡を繰り広げた五代十国のうち、地方政権である「十国」の一つであった孟氏の後蜀をさす。合江園はその離宮の跡地で、大規模な梅園があり、当時の成都における梅の名所であった。成都時代、陸游は折に触れてはここを訪れたらしく、詩題にしばしば言及がある。[13]「説著」は、話せば、話をすれば。「著」は、動詞の後につく助詞。「断魂」は、「断腸」とほぼ同義。唐・杜牧の作と伝えられる七絶「清明」に「清明時節雨紛紛、路上行人欲断魂〔清明の時節雨紛紛たり、路上の行人　魂を断たんと欲す〕」とある。「月底」は、月の光の下で。「却」は、意外な感じを表す。梅花に深く感情移入し、梅花だけが自分の気持ちをわかってくれる、とうたう後半は、単なる花見の詩というよりは、宵闇に紛れての恋人との逢瀬のようでもある。韻字は、園、魂、言。韻の種類は、上平声十三・元韻。

其二

○○●●●○◎
当年走馬錦城西
○●○○●●◎
曽為梅花酔似泥
●●●○○●●
二十里中香不断

其の二

当年　馬を走らす　錦城の西
曽て梅花の為に　酔いて泥に似たり
二十里中　香り　断えず

○○○●●○◎
青羊宮到浣花溪　青羊宮より浣花溪に到る

《梅の花の絶句》その二

その昔、成都の街の西側で馬を走らせ、梅の花のために、泥のようにぐでんぐでんに酔いしれたものであった。二十里もの間、梅の花の香りが途切れることはなく、青羊宮から浣花溪にまでたどり着いた。

第二首は第一首を承け、さらに成都時代を回想する。第一首は幾分沈鬱な調子が支配的であったが、第二首はそれとは対照的に、むしろ浮き立つような軽快な気分が支配的である。「当年」は、その昔。「錦城」は、成都の別名。成都は錦の産地として名高いことから「錦官城」といい、また「錦城」ともいう。陸游は蜀から帰郷した直後に書いた七古「懐成都〔成都を懐う〕十韻」（『詩稿』巻十）冒頭でも、「放翁五十猶豪縦、錦城一覚繁華夢〔放翁五十にして猶お豪縦なるも、錦城一たび覚む　繁華の夢〕」とうたっている。

「酔似泥」の語は、唐・李白の雑古「襄陽歌」に「傍人借問笑何事、笑殺山公酔似泥〔傍人　借問す　何事をか笑うと、笑殺す　山公の酔いて泥に似たるを〕」とあるのに由来する。松浦友久氏の『李白詩選』（一九九七年一月、岩波文庫）は、「酔似泥」を「ぐでんぐでんに酔う」の意とした上で、次のように解説している。

「泥」は、伝説中の、南海にすむ虫の名。骨がなく、水中では活撥だが、外に出るとぐにゃぐにゃに酔って泥どろのかたまりになる、とされる。従って「泥酔」は「泥のように酔う」が第一義だが、「泥」という名はどろどろの「泥水」のイメージから生まれているので、「泥のように酔う」と訓んで差支ない。[14]

宋代の「二十里」は、約十一キロメートル。後述する青羊宮から浣花溪までの、大体の距離をいうのであろう。その間梅の香りが途切れることなく続いているという表現に、詩人の高揚した気分が感じられる。「青羊宮」は、唐代の始めに建てられた有名な道観（道教の寺院）で、今も成都の観光名所となっている。陸游はこの詩の他にも折に触れては青羊宮の梅花を回想しており、一例として、この連作の四年前、慶元四年に書かれた「梅花」六首（『詩稿』巻三十七）其六にも「青羊宮前錦江路、曽為梅花酔十年〔青羊宮前　錦江の路、曽て梅花の為に酔うこと十年なり〕」とある。[15]「浣花溪」は、成都の西を流れる川の名。唐・杜甫がそのほとりに草堂を構えたことで知られる。陸游も、范成大の幕府を免官になった後、この付近に住んでいた。

ところで馬を走らせての花見といえば、唐・孟郊の七古「登科後」に「春風得意馬蹄疾、一日看尽長安花〔春風　意を得て

馬蹄疾し、一日に看尽くす　長安の花」」とあるのが想起される。唐人の孟郊がうたうのは色彩鮮やかな牡丹の花であろうから、陸游のこの詩と直接関係はないかも知れないが、換骨奪胎は宋人のお家芸であり、まったく無関係とも言いがたいように思われる。韻字は、西、泥、渓。韻の種類は、上平声八・斉韻。

其三　　其の三

○●○○●●◎　　聞道らく　梅花　暁風に坼き
聞道梅花坼暁風

●○●●●○◎　　雪堆　遍く四山の中に満つと
雪堆遍満四山中

○○●●○○●　　何れの方によりてか　身を千億に化し
何方可化身千億

●●○○●●◎　　一樹の梅前に一放翁なるべき
一樹梅前一放翁

《梅の花の絶句》その三

聞くところによれば、梅の花が明け方の風の中でほころび、降り積もった雪のかたまりのようにまっ白な花が、あまねく四方の山々に満ちあふれているとのこと。ああ、どうにかしてわが身を千億の分身と化し、一本一本の梅の木の前に一人一人の放翁じいさんがいるようにすることはできないものだろうか。

連作のうち最も有名な一首であり、この一首のみを収録する選集も少なくない。この第三首で詩人の意識は、時間的にも地理的にも遠い成都時代の回想から、瞬時にして今現在自分が住む故郷の山陰へと舞い戻って来る。そこに必ずしも論理的な脈絡はなく、幾分唐突で気紛れな展開のようにも思われる。しかしある意味で、この自由さ、奔放さこそが、天性の詩人たる「放翁」こと陸游の真骨頂とも言えるのではなかろうか。

「聞道」は、聞くところでは。「坼」は、花がほころびる。「暁風」は、明け方の風。「雪堆」は、雪のかたまり。まっ白な梅の花をたとえる。[16] 陸游の故郷山陰は成都にも負けない梅の名産地であり、特に枝と幹にびっしり苔の生えた古梅が、都で珍重されたという。[17]「四山」は、四方の山々。

「方」は、方術。仙人の使う不思議な術。ここでは分身の術をさす。梅花がいとおしくて仕方ない陸游は、数え切れないほどの梅の花を心ゆくまで観賞したいがために、わが身を千億にも分身させることを思いつく。類似の発想は、唐・柳宗元の七絶「与浩初上人同看山寄京華親故〔浩初上人と同に山を看て京華の親故に寄す〕」にすでに見える。[18]

海畔尖山似剣鋩　　海畔の尖山　剣鋩に似たり
秋来処処割愁腸　　秋来　処処　愁腸を割く
若為化得身千億　　若為んぞ　化して身の千億なるを得て
散上峰頭望故郷　　散じて峰頭に上りて故郷を望まん

剣の切っ先のようなけわしい山々が立ち並ぶ、南方の異郷の風景。それを見るにつけても望郷の思いはつのる。陸游は、これを換骨奪胎したのであろう。吉川幸次郎氏の『宋詩概説』（二〇〇六年二月、岩波文庫）序章「宋詩の性質」第八節「唐詩と宋詩」は、「唐詩と宋詩の差違を示す、おもしろい資料」として柳宗元と陸游の七絶を比較し、次のように論じている。

ところで、一千一億とわが身の分身を作りたいという発想は、陸游の独創ではない。もとづくものがある。唐の柳宗元が、その遷謫の地、広西の柳州で作った絶句である。……千億のわが分身というねがいはおなじでありながら、唐詩では、その一つ一つをつるぎのきっさきのような異郷の山のてっぺんにぶらさげて、ふるさとを見はるかしたいと、悲しいねがいを凝集させるのに対し、宋詩ではたくさんの梅の木の一つ一つのそばに、一つずつわが分身をという、平静な快楽のねがいとなっている。

柳宗元は、政治改革に挫折し、僻遠の地に流された絶望的状況を前提に詩を書いており、おのずから悲痛な感慨をうたっている。それに対し陸游の詩は、不遇とはいうものの、故郷に安住し自適の晩年を送る老詩人の閑適の述懐であり、清澄な境地が感じられる。陳衍の『宋詩精華録』は第三句に「一樹梅花一放翁」と圏点を施し、次のように評している。

柳州之化身何其苦、此老之化身何其楽。

柳州（柳宗元）の化身は、何と苦しげなことか。この老人（陸游）の化身は、何と楽しげなことか。

なお、この分身の発想が仏典に由来することを示唆する注釈があるが、私は仏教哲学に明るくないので、解説は他書に譲ることにしたい。[19] ところで、『校注』『宋詩鈔』いずれも「一樹梅前」の「前」の下に小さく「一作花〔一に花に作る〕」と記している。「前」も「花」も平字であるから平仄的にはどちらでも構わないが、常識的に考えるならば、「梅花」の重複を避ける意味で「梅前」の方が好ましいであろう。ただし『宋詩精華録』は「梅花」としている。韻字は、風、中、翁。韻の種類は、上平声一・東韻。

其四

●○○●●○◎
小亭終日倚闌干
●●○○●●◎
樹樹梅花看到残
●●●○○●●
只怪此翁常謝客
○○●●●○◎
元来不是怕春寒

其の四

小亭にて　終日　闌干に倚り
樹樹　梅花　看て残なわるるに到る
只だ怪しむ　此の翁　常に客を謝するを
元来　是れ春寒を怕るるにあらず

《梅の花の絶句》その四

小さなあづまやで一日中手すりによりかかり、どの木の梅の花もすっかり散り落ちてしまうまで、飽かず眺めている。このじいさんがいつも来客を遠ざけているのはなぜだろうと、ただただいぶかしく思っていたが、何とまあ、春の寒さを心配していたわけではなかったとは。

第四首は必ずしもよく知られる作品ではないが、第三首と対比させて読んでみると、それなりに味わいがある。実際には分身の術など使えるはずもないので、詩人は発想を変え、あちこちと歩き回るのではなく、見える範囲の梅花をじっくり観察することにしたもののようである。

「小亭」は、小さなあづまや。「終日」は、一日中。「倚」は、よりかかる。「闌干」は、「欄干」に同じ。唐・李白の七絶「清平調詞」其三に「解釈春風無限恨、沈香亭北倚闌干〔解釈す春風　無限の恨み、沈香亭北　闌干に倚る〕」とある。李白が楊貴妃の美しさをたたえる詩で用いた表現を、老詩人の花見の詩に転用した所が面白い。「看到残」は、花がすっかり損なわれてしまうまで見ている、の意。梅花の観賞が一日にとどまらないことを表す。

「只怪」は、ただひたすら怪しむ。自分自身の行動を第三者の視点でとらえ、突き放して表現したものである。後半二句は幾分おどけた筆致で書かれているが、要するに、俗人と面会して鬱陶しい思いをする位なら、清楚な梅の花と向きあっていた方がいい、というのであり、なかなか人を食った表現である。ユーモアの背後に、世に容れられなかった詩人の孤独感が透けて見えるかのようでもある。韻字は、干、残、寒。韻の種類は、上平声十四・寒韻。

其五

●○○●○○●
乱簪桐帽花如雪
○●○○●●◎
斜挂驢鞍酒満壺
○●○○○●●
安得丹青如顧陸
○○●●●○◎
憑渠画我夜帰図

其の五

桐帽に乱れ簪して　花　雪の如く
驢鞍に斜めに挂けて　酒　壺に満つ
安くんぞ丹青の顧陸の如くなるを得て
渠に憑りて我の夜帰の図を画かしめん

《梅の花の絶句》その五

桐の帽子に乱れ挿した梅の花は、まるで白い雪のよう。驢馬の鞍に斜めにかけた酒は、壺一杯に満ちている。ああ何とかして、顧愷之や陸探微のような絵の名人を捜し出し、彼らによって私が夜花見から帰る姿を絵に描いてもらうことはできないものだろうか。

第五首は、連作全体のクライマックス。梅の花を折りたい放題折りとって帽子に挿し、上機嫌の放翁先生。花見酒も登場し、愉快な気分は頂点に達する。詩の前半は、整った対句で構成されている。「桐帽」は、桐の木で作り漆を塗った帽子。もとは蜀の人の作ったものであると、北宋・黄庭堅の詩の任淵注に見える。[20] 陸游は蜀での生活の記念として、帰郷後も桐帽を愛用していたのであろうか。淳熙十年に書かれた五律「遊前山〔前山に遊ぶ〕」（『詩稿』巻十五）でも「平生一桐帽、自惜犯塵埃〔平生　一桐帽、自ら惜しむ　塵埃を犯すを〕」とうたっている。

「簪」は、名詞としてはかんざしの意だが、ここでは動詞として用いられている。梅の枝を手折り、それをかんざしのように帽子に挿す、というのである。現代の感覚からすると幾分無作法であるが、天真爛漫な詩人はそんなことには頓着しないのであろう。この時に限らず、陸游は他の詩でも、梅の枝を手折り帽子（時には冠）に挿すことを繰り返しうたっている。[21] もっとも花を頭に挿すこと自体は、花こそ違え、すでに北宋・蘇軾の七絶「吉祥寺賞牡丹〔吉祥寺にて牡丹を賞す〕」にもうたわれており、当時の通念からして陸游だけが特別に無作法というわけではないのかも知れない。参考までに、蘇軾の詩を次に示す。花見酒に酔い、牡丹の花を頭に挿してふらふらと帰る詩人の姿を、街の人々が面白がり、すだれを巻き上げ、笑いながら眺めている、という情景である。

人老簪花不自羞　人は老い　花を簪にして自ら羞じざるも
花応羞上老人頭　花は応に老人の頭に上るを羞ずべし
醉帰扶路人応笑　醉いて帰り　路に扶けられ　人　応に笑うべし
十里珠簾半上鈎　十里の珠簾　半ば鈎に上る

陸游の詩に戻ろう。第二句には、花見酒の壺をぶら下げた驢馬がうたわれている。陸游と驢馬といえば、南鄭から成都に赴く際に書かれた七絶「劍門道中遇微雨〔劍門の道中にて微雨に遇う〕」（『詩稿』巻三）が連想されるが、[22] 故郷の日常生活でも、詩人は身近な乗り物として驢馬を愛用していたのであろう。より晩年の開禧元年に書かれた七絶「山村経行因施薬〔山村を経行し因りて薬を施す〕」五首（『詩稿』巻六十五）其四にも、「驢肩毎帯薬囊行、村巷歓欣夾道迎〔驢肩　毎に薬囊を帯びて行き、村巷　歓欣し　道を夾みて迎う〕」と、驢馬に乗って無医村を巡回することがうたわれている。

「丹青」は、赤や青の絵の具。「顧陸」は、六朝時代の高名な画家たち、東晋の顧愷之と南朝宋の陸探微をさす。自分の姿を絵に描いてもらいたい、という発想は陸游の他の詩にも見え、たとえば淳熙八年に書かれた七絶「蔬圃絶句」（『詩稿』巻十三）其二は「枯柳坡頭風雨急、憑誰画我荷鉏帰〔枯柳坡頭　風雨急なり、誰に憑りてか我が鉏を荷いて帰るを画かしめん〕」とうたっている。前出「劍門道中遇微雨」詩の名句「細雨騎驢入

劍門〔細雨　驢に騎りて劍門に入る〕」は、その後多くの画家が好んで描く画題となったが、陸游のこの「梅花絶句」を描いた絵があるかどうか、私は寡聞にして知らない。想像してみると、梅の枝を帽子に挿し、酒壺をぶら下げて驢馬にまたがる詩人の姿は、案外面白い絵になるかも知れない。なおこの詩、「如」の字が二ヶ所に用いられているのがやや難点である。また文字の異同があり、「安」の字を『宋詩鈔』は「若」とする。韻字は、壺、図。韻の種類は、上平声七・虞韻。

其六

○○●●●○◎
紅梅過後到緗梅
●●○○●●◎
一種春風不並開
●●○○○●●
造物無心還有意
●○●●●○◎
引教日日放翁来

其の六

紅梅　過ぎし後　緗梅に到る
一種の春風なるも　並びては開かず
造物　心無きも　還た意有り
引きて　日日　放翁をして来たらしむ

《梅の花の絶句》その六

紅梅の季節が過ぎた後、黄梅の季節がやって来る。同じ一つの春風なのに、紅梅と黄梅が同時に花を咲かせることはない。造物主には人間のような心はないものの、やはりそれなりの心づもりがあると見え、この放翁じいさんを毎日花見にやって来させるのだ。

連作の最後の一首であり、梅花の季節を総括してこの小品を締めくくる。小田美和子氏の論文「梅花と春　―六朝詩と陸游詩を中心として―」の第一節「梅花の特性「早開早落」」に、次のようにある。

中国詩において単に梅花とあれば白梅を意味する。陸游詩の梅花の殆どは白梅で、「紅梅過後到緗梅、一種春風不並開」白梅の次に紅梅、その後が緗梅という順に開花する。……梅花の開花期間は比較的長く、同種のものでも年によって、地方によって、樹によっても開花時期は異なるが、中国の詩人は厳寒の中に咲くのが梅花の特質とみている。……早ければ冬至の頃には早梅が見られたようである。

「緗梅」は、黄梅。もしくは、あさぎ色の梅。これまでに見た五首のうち、「雪堆」「如雪」などと形容される其三、其五は当然白梅の詩であり、其一も、月の光に照らし出されるのは清楚な白梅がふさわしい。其二、其四は表現の上では必ずしも決め手がないが、やはり白梅と考えて特に問題はないであろう。連作の最後に来て、時の推移と共に白梅の盛りは過ぎ、異なる種類の梅花が登場する。陸游の梅花鑑賞が、梅の季節全体に及

ぶ息の長いものであったことがわかる。

「一種春風」について。参考までに、陸游の友人范成大の七絶「晩歩西園〔晩に西園を歩む〕」に「吹開紅紫還吹落、一種東風両様心〔吹きて紅紫を開かしめ還(ま)た吹きて落とす、一種の東風　両様の心〕」という句があるのをあげておく。これは、同じ春風（東風）が、色取り取りの花を咲かせるかと思えば、また吹き散らすという両面性を持っていることをうたうものである。内容的には異なるが、表現の上で陸游の詩との類似が認められ、興味深い。

「造物」は、造物主。「天公」ともいう。万物を創造した天の神。『全宋詩』によれば、「造物」の語は陸游の詩に全部で百十七例、「天公」の語は全部で八十七例ある。陸游は特定の宗教を信じていたわけではあるまいが、折りに触れては、森羅万象の根源にある人智を超越した力に思いを馳せることがあったのであろう。本当は自分の意志で毎日花見に出かけるのを、造物主がそのように仕向けるのだ、ととぼけてみせる所が面白い。

韻字は、梅、開、来。韻の種類は、上平声十・灰韻。

これで、陸游の「梅花絶句」六首を一通り鑑賞したことになる。不備な点は多々あろうが、全体が紹介される機会はほとんどない作品なので、連作として論評を試みたこと自体に一定の意義はあろうかと思われる。小さな梅の花の一つ一つをいとおしむように、絶句の一字一句をなるべく慎重に取り扱ったつもりであるが、結果的には言葉の表面をなぞっただけで終わってしまったようでもあり、どこまで陸游の真情を汲み取ることができたか、甚だ心もとない。大方の御批正を仰ぐ次第である。本稿を手はじめとして、次の段階としては、『宋詩鈔』に収録されている陸游のその他の詠梅詩にも目を向けてみたいと考えている。[23] 陸游の詩境をより深く感じ取れるように、今後も精進を重ねて行きたい。

注

（1）小田美和子氏の論文「梅花と春　―六朝詩と陸游詩を中心として―」（一九九七年三月、藤原尚教授広島大学定年祝賀記念『中国学論集』所収）、岩城秀夫氏の『漢詩美の世界』（一九九七年六月、人文書院）のうち「梅のうた　―実から花へ―」の一章、合山究氏の小論「梅花と宋代精神」（『新釈漢文大系』季報第九十四号　一九九八年十月、明治書院）などを参照のこと。

（2）北宋を代表する大詩人蘇軾の梅花に寄せる思いについては、岩城秀夫氏の論文「梅花と返魂　―蘇軾における再起の悲願―」（『日本中国学会報』第三十集）に詳しい。また村上哲見・浅見洋二両氏の『鑑賞中国の古典21　蘇軾・陸游』（一九八九年二月、角川書店）のうち「謫居（黄州流謫中の作）」の一章を参照のこと。

（3）鄒志方氏の『陸游詩詞浅釈』（一九九七年十二月、海南出版社）は、陸游の詠梅詩を百六十数首、詠梅詞を五首とする。なお陸游の詠梅詞の中では「卜算子　詠梅」が最も有名である。『風絮』第二号（二〇〇六年三月、宋詞研究会）一九八頁を参照のこと。

（4）『全宋詩』によれば、陸游詩に「梅花」の語の用例は全部で百五十二例あり、その中には、詩題に「梅花」の語を含まない出典も多い。逆に、詠梅詩であることが詩題に明記されていても、詩の中で「梅」「梅花」の語を使わないものも存在する。この小論では、詩題に梅をうたった作品であることを明記するものに限って考察した。

（5）ただし「梅開絶晩有感」の制作時期を『劍南詩稿校注』は「嘉定三年春」としている。陸游は嘉定二年の年末に没しているので、これは明らかに誤りである。したがってこの場合のみ同書の記述を訂正した。

（6）「題施武子所蔵楊補之梅」は、描かれた梅に添えられた題画詩であるが、一応詠梅詩として扱った。

（7）「梅花過後遊西山諸庵」は、梅花の季節が過ぎた後の行楽をうたっている。しかし、詩題と詩中で梅に言及しているので、一応詠梅詩として扱った。

（8）陸游に「梅花絶句」と題する連作は全部で五組ある。第一は、淳熙五年に書かれた七言十首（『詩稿』巻十）。第二は、紹熙二年に書かれた五言十首、第三は、同年に書かれた七言二首（いずれも『詩稿』巻二十四）。第四は、嘉泰元年に書かれた七言四首（『詩稿』巻四十九）、第五は、嘉泰二年に書かれた七言六首（『詩稿』巻五十）である。第一が建安で書かれた他は、すべて山陰で書かれている。一覧表を参照のこと。

（9）河上肇氏の『陸放翁鑑賞』（二〇〇四年九月、岩波書店）は、五言「梅花絶句」十首のすべてを収録している。また『宋詩別裁集』は、五言「梅花絶句」十首の其四と「梅花」五首の其四を収録している。

（10）『劍南詩稿』巻五十の巻頭は七律「開歳」であり、一首おいて次が「梅花絶句」である。その直後が七律「立春日」であり、その自注に「壬戌開歳四日立春」、この年は年明け四日めが立春であった、と記されている。陸游の詩が書かれた順番に並んでいるとすれば、この連作は嘉泰二年正月の三日までに書かれたことになる。

（11）『宋詩鈔』及び清・曽国藩の『十八家詩鈔』は、六首すべてを収録。村上哲見・浅見洋二両氏の『鑑賞中国の古典21　蘇軾・陸游』（前出）は、其一、其三、其四、其六の四首を収録。石川忠久氏の『漢詩をよむ　陸游一〇〇選』（二〇〇四年十二月、日本放送出版協会）は、其二、其三、其六の三首を収録。疾風氏の『陸放翁詩詞選』（一九五八年四月、浙江人民出版社）は、其三と其四の二首を収録。陳衍氏の『宋詩精華録』及び前野直彬氏の『陸游』（一九九七年二月、集英社）は、其三のみを収録している。

（12）『宋史』陸游伝に「范成大帥蜀、游為参議官。以文字交、不拘礼法」とある。

（13）七律「自合江亭渉江至趙園」（『詩稿』巻六）、七古「遊合江園戲題」、七律「合江夜宴帰馬上作」（以上『詩稿』巻七）など。

（14）「活撥」「訓」「差支」の振り仮名は、筆者による。他は原書のまま。

（15）この他、淳熙五年の七絶「梅花絶句」（『詩稿』巻十）其九に「青羊宮裏応如旧、腸断春風万里橋」とあり、嘉定元年の七絶「梅」（『詩稿』巻八十）其一に「渓頭忽見梅花発　恰似青羊宮裏時」とある。

（16）陸游は、七古「故蜀別苑在成都西南十五六里……」（『詩稿』巻九）でも「蜀王故苑犁已遍、散落尚有千雪堆」とうたっている。もっとも、梅の花を雪にたとえる発想は、決して陸游の独創ではない。南朝陳・蘇子卿の五古「梅花落」に、すでに「中庭一樹梅、寒多葉未開。只言花是雪、不悟有香来」とあり、またこれを翻案した北宋・王安石の五絶「梅花」に「牆角数枝梅、凌寒独自開。遥知不是雪、為有暗香来」とある。

（17）「梅花絶句」（『詩稿』巻十）其七の自注に「山陰古梅、枝幹皆苔蘚、都下甚貴重之」とある。

（18）この柳宗元の七絶は、入谷仙介氏の『唐詩の世界』（一九九〇年十月、筑摩書房）に収録されている。詳しい解説は、同書の四十五頁を参照のこと。また、陸游の『老学庵筆記』巻二に同じ七絶に対する言及が

あり、陸游が柳宗元のこの詩を知っていたことが確認できる。

(19) 銭仲聯氏の『剣南詩稿校注』は、『梵網経』「盧舎那仏説菩薩心地戒品第十」の「千花上仏、是吾化身。千百億釈迦、是千釈迦化身」という一節を、この詩の注釈として引用している。村上哲見・浅見洋二両氏の『鑑賞中国の古典21　蘇軾・陸游』二四四頁を参照のこと。また前野直彬氏の『陸游』は、宋・法雲の『翻訳名義集』の一節を、この詩の注釈として引用している。同書二四八頁を参照のこと。

(20) 黄庭堅の七古「次韻子瞻以紅帯寄王宣義」に「白頭不是折腰具、桐帽棕鞵称老夫」という句があり、その任淵注に「桐帽本蜀人作、以桐木作而漆之」とある。

(21) たとえば七絶「道上見梅花」（『詩稿』巻九）に「載酒房湖風日美、探梅喜折一枝新」とあり、また七絶「観梅至花涇高端叔解元見尋」（『詩稿』巻二十四）其一に「帰見諸公問老子、為言満帽挿梅花」とある。この他、七絶「暁起折梅」一首（『詩稿』巻七十四）がある。その他の例については、岩城秀夫氏の『漢詩美の世界』三十四頁を参照のこと。

(22) この詩については、趙斉平氏原著、拙訳「細雨　驢に騎りて　剣門に入る　―陸游の『剣門の道中　微雨に遇う』詩について―」（愛大語学教育研究室「言語と文化」第十一号）を参照のこと。

(23) 『宋詩鈔』に収録されている陸游の詠梅詩は、収録順に、七絶「梅花絶句」十首の其四、其五、其八、其九、七絶「観梅至花涇高端叔解元見尋」二首の其二、七律「小飲梅花下作」、七絶「梅花絶句」六首、七律「探梅」、七律「湖山尋梅」二首の合計十九首である。このうち「観梅至花涇……」其二は、石川忠久氏の『漢詩をよむ　陸游一〇〇選』（二〇〇四年十二月、日本放送出版協会）に収録されている。